

# 毛沢東の文献研究についての回顧と課題

村田 忠禧

## Review and Problems of Study on the Writings of Mao Zedong

Tadayoshi MURATA

はじめに

『毛沢東集補巻』の編集の思い出

『毛沢東集補巻』と改革開放政策の関係

『毛沢東集』と『毛沢東集補巻』の差異

『毛沢東伝』の翻訳

中共中央の最高指導者の文献取り扱いについての規定

『中共中央文件選集』の問題点

『毛沢東文集』の問題点

歴史の書き換えで本当の学習ができるのか

研究と学習

### はじめに

華東師範大学の周一平教授は2003年3月に横浜国立大学教育人間科学部外国人客員研究員として来日した時、書き上げたばかりの論文『『毛沢東集』、『毛沢東集補巻』校勘略記』を持参し、『毛沢東集』、『毛沢東集補巻』の編集に関わったわれわれ日本の研究者の意見を求めてきた。彼がこの論文を書く直接のきっかけを作ったのは私である。2002年9月に華東師範大学で講義をした際に、『毛沢東集』と『毛沢東集補巻』を寄贈した。『毛沢東集補巻』は出版社の蒼蒼社に在庫がまだ沢山あるため、それを購入することができた。しかし『毛沢東集』第二版はすでに完売しており、古書店で探しても入手できなかった。わずかに残っていた『毛沢東集』第二版1セットをすでに私が中共中央党校党史教研部主任の郭徳宏教授のために買って寄贈してしまったためである。1970年代に出版された北望社版『毛沢東集』ならある、というので、やむなく周一平教授には北望社版を贈呈した。<sup>1</sup>

当時、彼が『毛沢東集』と『毛沢東集補巻』の校勘作業をするとは予想もしていなかった。もしそのことを知っていたら、『毛沢東集』には第二版があるので、そちらを校勘の対象にすべきことを伝えておいたであろう。第二版が存在することを知らぬまま、旧版『毛沢東集』を用いて校勘作業をしていることを知ったのは、かなり作業が進んでからのことであり、申し訳ないことをしたと思っている。

## 『毛沢東集補巻』の編集の思い出

私は第二版も含め『毛沢東集』の編集には関わってはいない。『毛沢東集補巻』の編集にも最初から関わっていたわけではない。1983年に蒼蒼社が出した『毛沢東集補巻』の出版予告案内を見て、そこには含まれていないが、すでに私が入手している毛沢東の文献がかなりあることを知った。私は当時、第二次国内革命戦争期、とりわけ井冈山期の毛沢東の上農武装割拠思想の形成と発展についての研究をしており、その過程で江西人民出版社や福建人民出版社などの地方出版社から出された資料集をかなり収集していた。<sup>2</sup> 当時、北京師範大学で汪精衛傀儡政権の研究を行っていた蔡徳金先生（故人）とお互いの研究に必要な資料の交換をしており、日本ではほとんど入手不可能な江西人民出版社発行の貴重な書籍を彼を通じて入手していたのである。それと併せて、香港で出版されていた高額のリプリント版を収集していた。せつかく毛沢東の文献集が日本で出版されようとしているのだから、傍観者を決め込むのではなく、この出版活動に積極的に参加・協力しようと考えた。そこで蒼蒼社を訪れ、社主の中村公省さんに会って私の持っている資料のリストを見せ、提供する意志のあることを伝えた。その際、私は一つの条件を出した。私の持っている資料を提供するが、当時出版されたばかりの『毛沢東集』第二版とこれから出版される『毛沢東集補巻』それぞれ1セットを対価として提供してくれないか、と。当時、私は東京大学の大学院生で、『毛沢東集』第二版は喉から手が出るほど欲しかったが、68000円という金額はとても大きな障壁になっていたのだ。中村さんの回答は、『毛沢東集』第二版については2割引で提供できる、今後出版される『毛沢東集補巻』については1セット提供する、というものであった。蒼蒼社という会社が、彼他にはアルバイト社員が1名いるだけの零細出版社であるという実情を目撃した以上、私もこの回答に従うしかなかった。

以後、私は単にこれまで自分が集めた資料を提供するだけでなく、未発見資料の探索作業にも乗り出すことになった。中村さんも彼がこれまで集めた工具書や資料集を積極的に提供してくれたので、私の調査対象はどんどんと広がっていき、いくつか新しい発見をすることができた。この当時のことを中村さんは「毛沢東の本名・変名・筆名についての覚書」という文章の冒頭で次のように書いている。

『毛沢東集補巻』の原テキスト渉獵に際して、恩恵にあずかったツールの一つに『中国共産党新聞雑誌研究』（アジア経済研究所）がある。この書に収められた『前鋒』雑誌の目録をめくって、「石山」名義の「省憲政下之湖南」（一九二三・七・一）を探し当てた村田忠禧が、息せき切って蒼蒼社に駆けつけてきた日のことはなお忘れ難い。<sup>3</sup>

中村さんのこの文章にはこのほかに「基礎戦術」という文献を毛沢東のものとして入れるか否かをめぐってスチュアート・シュラムと私が東京・六本木にある日本国際文化会館で「対決」した時の様子も紹介されている。シュラムはこの「対決」のあと北京に行き、中央文献研究室副主任（当時）の龔育之から「基礎戦術」が毛沢東の著作ではないとの見解を聞かされ、私の見解が正しいことが証明された。龔育之がシュラムに語った内容には他にもいろいろ重要なことが含まれており、それはのちに龔育之著『在歴史的転折中』<sup>4</sup> に収められて出版されている。私はシュラムとの対談を日本語に訳して前述の『歴史の中の毛沢東』に掲載しておいた。

実際に行なったことのある人なら判るだろうが、資料集めは大変な作業である。ごみの山の中から宝石を見つけ出すようなもので、新発見の資料と思って喜んで蒼蒼社に持ち込んだところ、実は

それはすでに収録されているものだった、というようなこともあったし、そのような場合はまだいいほうで、従来の結果をただ再確認したにすぎない場合がほとんどであった。マイクロフィルムに収められた手書き資料は、そもそも撮影状態が悪く、不鮮明で、読みにくいし、誤字や脱字もある。マイクロリーダーの暗い画面を長く見つめていると目が疲れる。大変な苦勞をしてやっと文字化することができ、自分なりに最善を尽くしたと思っていたが、その後中国で出された論文などに紹介されている内容と比較してみて、私が文字化したものに部分的な誤りがあることが判明し、自分の力のなさを思い知らされたことも何度かあった。かなりの時間と労力、そして資力を毛沢東の資料集めに費やしたが、私にとってとてもよい学習と鍛練の場になった。

### 『毛沢東集補巻』と改革開放政策の関係

このような奮闘の甲斐あって、当初は本文5巻、著作年表1巻の計6巻本で刊行する予定であった『毛沢東集補巻』が、最終的には本文9巻、著作年表1巻の計10巻本に膨れ上がった。蒼蒼社は『毛沢東集補巻』刊行作業の完結を記念して1986年3月23日にシンポジウムを開催した。この日、春の東京には珍しく大雪が降り、交通手段は大混乱したが、京都から『毛沢東集補巻』監修者の竹内実教授、遠くアメリカから前述のシュラム教授がやってきて、それぞれ毛沢東についての報告を行なった。私も「数字からみた『毛沢東集補巻』の特徴」と題する報告を行ない、そのなかで次のように指摘した。

「すなわち、『毛沢東集補巻』の資料来源は大きくいって、近年中国において第一次資料としての新聞、雑誌あるいは党内文献等档案の公開が、影印版の出版もしくは資料集の編纂という形で急速に進展しているということが指摘できます。しかし、ただ資料がいろいろ公開されただけでは毛沢東の文献を探し出すことはなかなか難しいことです。なぜなら彼の署名が入っている文献の数はごくわずかです。個人名が入っていても毛沢東の文献であることを確定するには、それを立証する『証言』が必要です。この意味で近年の中国における党史研究の進展と回憶録の出版は毛沢東文献収集に多大な役割を果たしていると言えます。つまり『毛沢東集補巻』が非常に多くの文献を収集できたこと背景には、中国における党史研究の新たな動き、いわゆる十一期中総以来の思想の解放と实事求是の精神にもとづく歴史の再点検の流れが大きく作用していると思います。この点は1983年当初は別巻の年表も含めて6巻本となる予定としてスタートした『毛沢東集補巻』が、86年3月の完結時には10巻本に変身したという事実をもってしても指摘できます。」<sup>5</sup>

つづいて私は以下のような指摘をした。

「同時に、『毛沢東集補巻』が80年代前半に中国で公開もしくは半公開（内部発行という形式による）された資料集に大きく依存していることで、注意しなければならないことがあります。それはこの時期に出版された資料集には誤字や誤植などの誤りがかなり見受けられるということです。研究者は『毛沢東集補巻』を利用するにあっても相当慎重になる必要があります。」

『毛沢東集補巻』の刊行事業は日本が中国とは関係なく独自に行なったものではあるが、実際には中国の改革開放後の動きと密接に関係していた。『毛沢東集補巻』の成果も、またその欠陥も当時の中国の資料開放や研究動向の進展の度合いとかなりの部分で連動していたのである。私は自分の研究活動を通じてそれを切実に感じており、以前から問題があることを指摘していた。1984年5月

に開かれた中国研究所研究大会・歴史分科会での報告「最近の中国における毛沢東研究の成果と問題点について」において次のように指摘している。

「総じていえば、十一期三中総以来の中国の党史研究（毛沢東研究も含めて）は大きな前進をはじめたといえることができる。〔中略〕だがもう一方で重要な問題が相変わらず未解決のままである。研究の基礎をなす資料に対する厳格さを欠く態度は残念ながら未だに改められていないように思われる。この点は研究の質を左右する重要問題なので、大いに問題にしなければならない。」<sup>6</sup>

そして私は「文献に対する厳格な姿勢の欠如」の表れとして「校勘がきちんとなされていない」、「編者の恣意的な削除が行われている」ことを指摘し、「史料に対する閉鎖性」が存在すること、『毛沢東選集』絶対視の弊害」として「史料の書き換え」、「毛選」にのった文献の原典は公開させない、「毛沢東の思想の発展を見落とす」といった欠陥があることを指摘した。

嬉しいことにこの拙論は発表されると間もなく中国語に訳され、中国の関係方面に注目されることとなったようである。拙論において編者による恣意的な削除が行われていると指摘した『周恩来選集』上巻の「中共中央給紅軍第四軍前委的指示信（1929年9月28日）」が、のちに中央档案馆編『中共中央文件選集』第5巻に収められた時には、問題の第8段落（「八 朱毛問題」）を含む全文が公開されることとなった。<sup>7</sup> 拙論の指摘がこの変化に積極的な役割を果たしたということを中心中央党校の蓋軍教授からのちに教えてもらった時の嬉しさは今でも忘れられない。

そのあと2000年6月に上海ではじめて周一平教授と知り合いになった時、彼が『史志研究』（季刊）2000年第2期に発表した論文「關於党史資料整理、出版的幾個問題」をいただいた。そのなかで前述した1984年の拙論において毛沢東の史料の書き換えについて指摘した部分を紹介し、「日本の学者の批評は中国の資料の整理、出版に携わる者が深く反省するに値するし、中国の学界及び学術研究の指導部門に携わる者が深く反省するに値する」<sup>8</sup> と高く評価してくれていた。中国にも私と同じような考えを持つ学者がいることを知り、驚くとともに喜びもした。

### 『毛沢東集』と『毛沢東集補巻』の差異

『毛沢東集』と『毛沢東集補巻』との違い、とりわけ『毛沢東選集』との関連性について、私は1986年の報告で次のように指摘した。『毛沢東集』には『毛沢東選集』に収録された文献のうちの66%の原典が、とりわけ1～3巻だけを問題にすれば79%の原典が収録されていること。その原因は『毛沢東集』を編集するにあたっての主たる来源が1944年の晋察冀日報社版『毛沢東選集』と1947年版晋察冀中央局版『毛沢東選集』にあることと大いに関係する。龔育之がシュラムへの談話のなかで紹介している通り、『毛沢東選集』の源流は1941年に延安で編集出版された『六大以来』にあり、それを編集する過程で毛沢東の思想への党内の共通認識が深まり、毛沢東思想という概念が提起されるようになったことと密接に関係しているためである。

「つまり『毛沢東集』の最大の成果とは『毛沢東選集』の原型をかなりの程度明らかにしたという点にあるといえます」。

それにたいして『毛沢東集補巻』では『毛沢東選集』に収められている文献の「わずか6%の積み上げしかできなかった」。「私はこの事実をもっと積極的な側面から評価すべきであると考えます。すなわち『毛沢東集補巻』の成果は『毛沢東選集』という枠を取り払ったという点にあると思います。『毛沢東選集』だけで考えればわずか6%の貢献しかできなかったといえるかもしれませんが、

それを上回る膨大な量の毛沢東文献を収集したということ、彼の足跡を記すあらゆる種類の文献が現在の日本で可能な限り収録されたこと、そのため延安期に作り上げられた毛沢東像にはまったく左右されない、歴史事実に即した毛沢東像を再現するうえで重要な資料を提供しているものとして『毛沢東集補巻』の果たす役割はきわめて大きいものがあると思います」。<sup>9</sup>

実際には『毛沢東集補巻』は「延安期に作り上げられた毛沢東像にはまったく左右されない、歴史事実に即した毛沢東像」の再現にはほど遠い成果でしかなかったが、1986年の時点で『毛沢東集』と『毛沢東集補巻』の違いをそれなりに的確に指摘したものと思っている。

私は1986年の段階で今後の毛沢東著作集の出版計画について龔育之がシュラムに語っている事実をもとに、いくつか予測を試みた。

「ことに『軍事文選（内部本）』は内容からするとあくまでも内部本に過ぎません。将来、本格的な軍事文選が出ることは間違いないと思います」と述べたことは的中し、1993年12月の毛沢東生誕100周年に『毛沢東軍事文集』全6巻が出版された。

「では『毛沢東全集』はいったいどうなるのでしょうか。私は1993年に第1巻を出版することを目標にしているのでないだろうかと推測しています。つまり毛沢東生誕100年にして初めて彼の全集が出る、それまではテーマ別著作集とか改訂版選集で切り抜けていく、というシナリオです。果たしてこのような予測が正しいのか、私としてはこの予測が外れ、一日も早く『毛沢東全集』が出版されることを望んでいます。ただし後世に恥じない正確な『全集』であってほしいと思います」。<sup>10</sup>

このうち、テーマ別著作集については『毛沢東集補巻』の刊行以前に出されていた『農村調査文集』、『書信選集』、『新聞工作文選』のほかに、『哲学批注集』、『早期文稿』、『外交文選』、『在七大的報告和講話集』、『致韶山親友書信集』、『詩詞集』、『文芸論集』、『論統一戦線』、『西藏工作文選』などが相次いで出された。内部発行という形式ではあるが『建国以来毛沢東文稿』（全13冊）も刊行された。また1991年の中共創立70周年を前にして『毛沢東選集』（1～4巻）の改訂版が刊行され、字句や年月日の訂正や注釈の修正など内容の正確さが向上したほかに1930年5月の「反対本主義」が新たに追加された。ただ生誕100周年にあたる1993年12月に『全集』第1巻が出るのでは、という予測は残念ながら外れた。しかしまったく的を外れであったわけでもなく『軍事文集』全6巻とともに『毛沢東文集』の第1巻と第2巻がこの年に出され、最終的には全8巻本の『毛沢東文集』が出されている。『毛沢東文集』には『毛沢東選集』にすでに収録されているものを除いた、その他の毛沢東の文献がかなり収録されていて、しかも収録するにあたって出典を明示し、可能な限り原典のまま紹介する姿勢が貫かれている。これらを総合すれば『毛沢東集』、『毛沢東集補巻』をはるかに凌駕する分量の毛沢東の文献が今日の中国で公開されているといえる。これは高く評価すべきことである。

## 『毛沢東伝』の翻訳

毛沢東逝去20周年にあたる1996年には中央文献研究室から建国以前の毛沢東についての公式の伝記『毛沢東伝（1893～1949）』が刊行された。『毛沢東伝』は中央文献研究室副主任の金冲及が主編となってまとめたもので、1949年までの毛沢東の歩みを豊富な資料と最新の研究成果にもとづいて生き生きと描いており、毛沢東の個性がかなりよく表現されていて、歴史読み物としても面白い。私はこの日本語版を出すことにし、『毛沢東選集』の日本語版翻訳に関わった黄幸氏と共同してその

作業を行い、みすず書房から1999年に上巻を、2000年に下巻を刊行した。日本語版『毛沢東伝 一八九三～一九四九』の訳者あとがきの一部をここに紹介しておこう。

「毛沢東研究において何ら特権的地位を享受しない、日本のごく一般的な大学の教員でしかない訳者としては、本書を訳するにあたって訳者としての『意地』を見せたく、本書において原著とは異なることをいくつか行なったので、ここにそれを記しておく。

原著では資料として採用する出典をきわめて厳格に選択しており、当てにならないものは一切採用していない。ただし原著の注釈では毛沢東をはじめとする中共指導者の著作の出典を、必ずしも一般の人が現在利用可能な著作集にもとづいて紹介していないところがある。科学的著作というものは検証可能なものでなければならず、根拠となる出典は正確に明記することで、読者が引用された典拠に自ら当たって、筆者の分析が妥当であるかどうかを点検できるように配慮すべきである。この点において、原著にはいささか不十分な点があるので、訳者は可能なかぎり原典を探し、注釈に追加しておいた。訳者の手元にある書籍から調べただけのことなので、十分なものとはいえないが、日本版の注釈に列挙されている出典の一覧そのものが毛沢東や中国現代史研究のための著作資料目録としての役割をはたせるほどのものになっている。

この典拠探しの作業にはかなり時間を費やしたが、なかなか意義のある作業であった。つまり訳者が入手していない毛沢東に関係する資料がどの程度あるのか、ということについてそれなりの把握ができた。未公開の毛沢東の資料という点では、書簡や電報の類に未公開のものがまだかなりあるということがわかった。同時に、延安期以降の会議録はかなりの部分が保存されていながらほとんど未公開のままであることが明らかになった。すでに半世紀以上も経っている資料であり、特権的機関の研究者のみが利用可能というような機密文書扱いは、改革・開放の精神に反するものであり、時代錯誤的感覚である。何らかの形で早急に公開してもらいたい。

もう一つ、興味深い事実を発見した。周知の通り、『毛沢東選集』は毛沢東自身がそれを編集する段階で、原典に手を加えており、必ずしも書かれた当初の通りのものではない。日本で出版された竹内実監修の『毛沢東集』および『毛沢東集補巻』は、原典と『毛沢東選集』との異なる具体的な対照を行っており、毛沢東の認識の変化を知るうえでとても貴重な情報を提供している。歴史研究と称するからには、当然のことながら原典を用いるべきである。しかし中国では、毛沢東が自ら修正しているのだから、『選集』で公表された著作はすべて『選集』の記述に従うべしとの規定があって、中央文献研究室の執筆者といえどもこの規定を破ることはできない。このような制約のもとにありながらも、本書の執筆者は原典にもとづいた分析を行っており、原典と『選集』との間で重要な変更がある部分は、適切に本書のなかで指摘しており、この点は大いに評価しうる。しかし科学的な毛沢東研究の発展を心から願うなら、日本で行なった『毛沢東集』、『毛沢東集補巻』の成果を乗り越えた、より正確で、より充実した毛沢東の原典著作集の刊行を行なうべきである。これはまさに中央文献研究室だからこそなしうる大切な任務であり、ぜひ二十一世紀初頭に着手してもらいたいことがらである。」<sup>11</sup>

この他に原本にはない年表と人名索引も日本語版では追加しておいた。最後に私は次のように書いておいた。

「『毛沢東伝』の翻訳は訳者にとってかなり大きな負担となってきたが、いまようやくその荷物を下ろすことができる。負担は大きかったが、その過程で得ることができたものは負担を補

って余りあるものがあり、毛沢東について、中国現代史についての理解をかなり深めることができた。本当にやりがいのある仕事であり、やってよかった、と心から思っている。おそらく日本語版『毛沢東伝』の読者も、本書を読了した後、同じ気持ちをもっていただけることであろう。建国後の『毛沢東伝』が同じような、あるいはもっと高いレベルの感動を与える書籍として2003年に登場することを願って、訳者のあとがきの締めくくりとしたい。」

2003年12月の毛沢東生誕110周年にあたり、『毛沢東伝(1949～1976)』が同じく中央文献出版社から出版された。未公開史料を大量に駆使した伝記で、資料集としての価値も高い重要な書籍といえる。しかもこの『毛沢東伝(1949～1976)』は2003年4月に出版された高文謙著『晩年周恩来』の内容をも念頭に入れて書かれていることは注目に値する。高文謙はかつて中央文献研究室で周恩来の文献研究に従事し、そののちアメリカに渡った人物であり、かつて毛沢東の医師をし、その後アメリカに渡って日本語訳名『毛沢東の私生活』という本を出した李志綏の後を継ぐような役割をはたしている。<sup>12</sup> 『毛沢東伝(1949～1976)』は大変価値のある書籍であることは間違いないのだが、本文の文字数が130万字にも達する巨編であるため、日本語に翻訳して出版するのはいろいろな意味で容易なことではない。

拙文の冒頭でも紹介した通り、毛沢東生誕110周年に向けて周一平教授は『毛沢東集』、『毛沢東集補巻』校勘略記』を書き、周教授はわれわれに続編を出版することを求めている。しかしもはや日本をはじめとする海外で毛沢東の文献集を出す時代は終わった、と私は考えている。その理由の第一は、海外独自の資料来源はもはや基本的にはないものと思われるからである。「基本的には」と書くのは、たとえば旧ソ連の档案館所蔵資料などに存在している可能性を否定できないからだ。『中共党史研究』2001年第2期には毛沢東とスターリンとの間で交わされた電報が紹介されており、このような事例はまだ出てくる可能性があるだろう。2004年に入ってから日本でも毛沢東の野坂参三に宛てた2通の手紙(1943年3月15日と1945年5月28日)が一橋大学の加藤哲郎教授によって発見され、公開されている。<sup>13</sup> また国民党などの档案資料から出てくる可能性も否定できないので、引き続き地道に探索することは重要である。だが中国大陸の外で新たに資料がまとまった形で出てくる可能性はきわめて低いであろう。

第二には、中国自身による資料の整理、公開が進んでいることである。1980年代の『毛沢東集補巻』の編集・出版においても、中国の公開・半公開資料が重要な役割を担っていたが、前述した通り1990年代以降、中国においてさらに着実に文献の整理と分析の作業が進展している。『毛沢東伝』の翻訳作業をして、中央档案館などにまだかなり多くの未公開資料、とりわけ電文や会議録が残されていることを知った。率直なところ、資料の収集という点ではもはやわれわれ外国人の出る幕はない、という印象を強く持った。これからは中国側が未公開資料を公開するのを待つしかない。<sup>14</sup> その前提に立ったうえで、以下には、中国の資料公開のやり方に相変わらず問題があることを指摘し、その改善を求めることとする。

## 中共中央の最高指導者の文献取り扱いについての規定

近年、中国での資料公開、情報公開は、少なくともこれまでの中国自身の対応との比較でいえば、驚くべきほど大きな進展が見られる。たとえば法律出版社より『中国共産党党内法規選編：1996～2000』が2001年6月に出版された。その編集説明によると1996年から2000年12月31日までの中共中央、中央紀律検査委員会、中央弁公庁、中央組織部などが発布した党内法規を収めたものであ

り、機密扱いされている文書は機密解除の手続きをしたうえで収録していることを明らかにしている。かつて『毛沢東集補巻』のための資料集めの過程で、中国で当時出版されていた書籍の多くが内部発行本であったことでいろいろと苦勞したことを思い起こすと隔世の感がする。『中国共産党党内法規選編：1996～2000』には1998年12月28日の「党と国家の主要指導同志の講話選編と研究著書の編集と出版を厳格に執行することに関する規定についての中共中央弁公庁の通知」（422～423頁）という通知文書が収められている。この通知のポイントは現任の中央政治局常務委員の講話や著作の取り扱いにあり、毛沢東、周恩来、劉少奇、朱徳の扱いについては1982年7月5日に中共中央が同年6月29日に中央宣伝部、中央文献研究室が提出した指示要請報告書の批准転送通知（『党的宣伝工作文件選編（1976～1982）』、965～966頁）がなお有効である、と指摘しているにすぎない。<sup>15</sup> 1982年7月5日の規定のポイントとは、建国前のものをも含めた毛、周、劉、朱の公開発表した文稿のうち、人民出版社が発行した各種選集に収められていないものは、いずれも中央文献研究室に送って審査を受けなければならない、ということである。この指示は『毛沢東集補巻』の来源を考えるうえでも興味深い。

すなわち文化大革命が終わり、中央および地方で文史資料収集活動が再開され、中央および地方レベルでさまざまな歴史資料の発掘と当事者の回想録の編集が進んだ。その成果をもとにして1970年代末から80年代初頭にかけて、江西人民出版社などの地方出版社が独自に各種資料集等を出版した。『毛沢東集補巻』に収められている多くの資料の来源は実はこの時のものである。しかしそれらには不正確なものもかなりあり、そのため地方が勝手に資料集などを出版することを禁ずる規定を出したものであると思われる。その後、この中央からの指示のもと、地方出版社の独自企画はほとんど消え、代わって中央文献研究室の審査を受けた、より信頼性の高まった出版物が出るようになった。質の悪い資料集に悩まされてきたものとしては、このような措置に反対する理由はない。

### 『中共中央文件選集』の問題点

『中共中央文件選集』（1989年8月～1992年10月、18冊本、中共中央党校出版社出版）は1921年の建党から1949年の建国までの中共中央の文献を編集し公開したものである。中央档案馆が編集し、中央文献研究室が審査にあたり、それぞれの文献の各種の版本を広く収集し、考証によって最もよいとされたものを底本にして活字化して印刷している。したがって中共党史研究にとって大変重要な資料集であることは多言を要しない。この資料集の編集方針として、毛沢東、周恩来、劉少奇、朱徳などの著作で、すでに選集あるいはテーマ別文集のなかに収められているものについては、ただその目録だけを示し本文は入れないことにしている。

『選集』や『文集』が一般の読者にとって容易に入手でき、しかも当時の内容を正確に反映しているのであるなら、そのような措置は道理にかなっているし、資源のムダ使いにならないので、納得できる。

しかし『中共中央文件選集』にはすでに中央指導者の『選集』に収められていながらその原件が収録されている例がある。私は『中共中央文件選集』すべてを調査したわけではないが、少なくとも三つの事例を紹介することができる。その一つは『周恩来選集』に収められている1929年9月28日の指示信であり、この経緯については前述した通りである。毛沢東に関しては一つは1929年12月の「中国共産党紅軍第四軍第九次代表大会決議案」（いわゆる「古田会議決議案」）であり、これは『毛沢東選集』第1巻においてその第一部分が「關於糾正党内的錯誤思想」と題して収められ

ている。『中共中央文件選集』第5冊には第一部分だけでなく決議案全文が収められているので、歓迎すべきことである。

もう一つの例外は1930年1月5日の「毛沢東給林彪的信」(『毛沢東選集』第1巻における表題は「星星之火，可以燎原」)で、『中共中央文件選集』第6冊は1941年12月に中共中央書記処編印『六大以来』にもとづいた原典を掲載している。なお1981年2月に人民出版社から内部発行という形で出版された中共中央書記処編印『六大以来』は1952年4月に北京で再発行した時に用いた紙型にもとづく印刷となっており、そこでは『毛沢東選集』に収録されたものは題名だけ列挙する扱いになっており、「毛沢東給林彪的信」は『毛沢東選集』における題名しか掲載されていない。

『中共中央文件選集』はなぜ例外的に「星星之火，可以燎原」ではなく「毛沢東給林彪的信」を掲載したのか。『毛沢東選集』(第二版)の「星星之火，可以燎原」の解題は、毛沢東がこの林彪に宛てた書簡において林彪の時局に対する観点を悲観的すぎると批判していたことについて、林彪が1948年に自分の名前を公表してほしくない中央に手紙で申し出たため、毛沢東がそれに応じて林彪の名前を削除し、内容についても一部書き改めたことを明らかにしている。『毛沢東選集』に収めたものは必ず毛沢東が最終的に確定したその表現にもとづくべしとする「規定」をあえて『中共中央文件選集』が無視した形になっている。これは林彪が後に歴史の罪人になったことと密接に関係するといえよう。

前述した通り『中共中央文件選集』は『毛沢東選集』に収録されたものについては、その原件を収めない方針で編集されている。そのことによってどのような問題が発生するかを次に紹介する。

中共中央は1928年6月4日に「中央致朱徳、毛沢東并前委信」を発した。それは『中共中央文件選集』第4冊239頁以下に中央档案馆所蔵の原件にもとづいてそれが公開されている。以前、この時期の研究をした際に「六月四日中央来信」の存在は知りながらも原文を見ることができないために大変苦勞した私にとって、これは欣喜雀躍するほどのできごとである。もちろん長らく中央との連絡が絶たれていた当時の毛沢東にとって、この中央からの指示信を受理した時の喜びはそれよりはるかに大きかったであろう。「中央六月四日の来信は江西省吉安県委員会経由で11月2日〔原文は12月2日とあるが、11月が正しい〕にようやく井冈山に届いた。この書簡は大変素晴らしく、われわれの多くの過ちを是正し、こちらで論争になっていた多くの問題を解決してくれた」と彼自身が当時、中央にあてた報告で書いている。<sup>16</sup>

この時、毛沢東のもとには中央来信のほかに4件の附属文書が届いた。<sup>17</sup> そのうちの「没収土地建立蘇維埃」と「国際二月決議」の二件については解読できたが、「軍事工作」と「組織問題」の二件は暗号が解読できなかったため、判読できなかった(「两件翻不出来」。このような状況のなか、11月6日に毛沢東は特委委員、軍および地方の活動分子三十名余りを集め、中央からの指示信と通告についての討論を組織し、その結果を中央に報告した。それが11月25日の「井冈山前委对中央的報告」である。

今日、幸いなことにこれらの文献は中央档案馆に保存されているため、中央が毛沢東等に宛てた文書すべてをわれわれは『中共中央文件選集』で読むことができ、当時の中央の紅四軍にたいする政策、方針を知ることができる。だがこれに対する井冈山前委の中央への報告を今日の中国の研究者が読むことは容易なことではない。『中共中央文件選集』第4冊には「井冈山的闘争」(1928年11月25日)の表題のみ記し、それは『毛沢東選集』第1巻に掲載されている、とあるが、「井冈山的闘争」は1952年7月に出版された『毛沢東選集』に収録されるにあたり、毛沢東自身が大幅に手を

加えたものであって、それと「井岡山前委対中央的報告」とを同一視することはできない。

そもそも「井岡山の闘争」だけを読めば、それがあたかも一編の独立した論文であるかのように誤解してしまうであろう。しかし前述した通り、これは毛沢東が紅四軍前敵委員会書記として、およそ5カ月前に中央から発出された指示信および附属する文献を受領し、それを検討したうえで中央に提出した報告なのである。したがってそこには中央の指示にたいする毛沢東たち現場の反応が示されており、当時の井岡山の闘争の具体的状況を紹介した豊富な歴史事実が記載されているが、それらの多くが「井岡山の闘争」では削除されている。そのためそこで展開されている見解は中央との交流の過程で生まれたものではなく、あたかも毛沢東が独自に開拓したものであるかのような誤解を招きやすい。しかも「井岡山前委対中央的報告」と「井岡山の闘争」という二つの文献を詳細に比較すると、毛沢東の中国革命の情勢や軍事闘争の展開にたいする認識に微妙な変化があることがよくわかる。両者を比較してみれば、「井岡山の闘争」をもって当時の毛沢東の認識や行動を判断してはならず、あくまでも「井岡山前委対中央的報告」という原典を用いた研究が必要なことが明白となる。

### 『毛沢東文集』の問題点

毛沢東生誕100周年を記念して発行が開始された『毛沢東文集』は、すでに『毛沢東選集』に収録されたものは収めないという原則で編集されているのだが、ここでも例外がある。1929年12月の「中国共産党紅軍第四軍第九次代表大会決議案」（通称、古田会議決議案）が『毛沢東文集』第1巻に収められている。周知の通り「古田会議決議案」の第一部分「糾正党内非無産階級意識的不正確傾向問題」は「關於糾正党内的錯誤思想」と題されて『毛沢東選集』第1巻に収められている。「著作の圧倒的部分は中央档案馆に保存している毛沢東の手稿、初期の版本、記録稿にもとづいており、本来の姿を保持している」とその出版説明が言明しているし、前述した通り、1990年4月出版の『中共中央文件選集』第5冊では、1937年末から1938年初めにかけて毛沢東がチェックした抄本にもとづく決議文の全文をすでに公開している。だから『毛沢東文集』にある「中国共産党紅軍第四軍第九次代表大会決議案」は本来の姿を再現していると思いたいが、実際にはそうではない。第一部分は1991年に出版された『毛沢東選集』（第二版）にもとづき、その他の部分は中央档案馆に保存されている1930年4月6日鉛印本にもとづいているのである。中央档案馆に保存されている1930年4月6日鉛印本では第一部分が欠落しているため、やむをえずこのような措置をとったというわけではない。したがって『毛沢東文集』に収められている「中国共産党紅軍第四軍第九次代表大会決議案」なるものは厳密な意味でいえば実在しないものである。ただ『毛沢東文集』の編者は『選集』と原件とを継ぎ足したものであるということを明示しているのだから、まだいくぶんか許せるところがある。もし密かにやっているとなると、文書偽造であると非難されても仕方のないことであろう。

かつて私は福建人民出版社が1979年12月に発行した『紅四軍入閩和古田会議資料文献』に収録されている1929年4月5日の「前委致中央的信」の内容の一部分が、毛沢東が林彪に宛てた書簡（1930年1月5日）に引用されたため、『毛沢東選集』における当該部分の書き換えにもとづいて1929年4月5日の書簡が逆に書き換えられている事実を明らかにし、「このような書き換えが『毛選』を絶対視する誤った考えからなされていることは明白である」と指摘した。<sup>18</sup> 私は当時、このような誤った考えは極左思想から脱却できていない、そして歴史文献についての正しい対処の仕方を学ん

でない地方レベルの研究者ゆえに発生しているのだろう、と思っていた。しかし私の判断が間違っていることをその後知った。実は文書の書き換えは中央文献研究室が編集した書籍においても発生しているのだ。

1945年4月から6月にかけて開催された中共第七次全国代表大会の開催50周年を記念して中央文献研究室は1995年5月に『毛沢東在七大的報告和講話集』を発行した。そこには10編の報告と講話が含まれている。そのうちの3編はすでに『毛沢東選集』に収録されており、他の2編がすでに公開されていたもの、残りの5編がこの時に初めて公開されたものである。分量があり、しかも内容的にもとりわけ重要なのは4月24日の「口頭政治報告」と5月31日の「結論」であり、いずれも中央档案馆に保存されている講話記録稿にもとづいて印刷したと明示されている。毛沢東は4月24日には「口頭政治報告」のほかに「書面政治報告」を提出しており、後者は「論聯合政府」と題され、『毛沢東選集』に収録されている。5月31日の「結論」において彼はこの「書面報告」に言及している個所がある。「人民民主勢力は必ずや勝利するものである。世界は進歩に向かって進むのであって、決して反動に向かって進むのではない」（『毛沢東在七大的報告和講話集』182頁）。しかし実際には毛沢東が当時このような引用をしたはずがない。そのように私が断言する根拠は何か。

現時点では中央档案馆に保存されている講話記録稿をわれわれは見ることができないが、『毛沢東選集』第9巻185～186頁を見れば、彼が本来引用しているはずの個所を知ることができる。本来の書面報告には「人民民主勢力は一定要勝利的」という表現はそもそも存在していない。しかも注目すべきことに毛沢東が国際情勢について語っているおよそ漢字数で三百字近い部分が『選集』に収められる段階でばつさりと削除されている。「結論」で毛沢東はさらに世界が「倒退」することがあるだろうか、という問題を投げかけ、「書面報告」の内容を紹介しているが、その部分も『選集』に合わせて書き換えられている。<sup>19</sup>

中央文献研究室の編者はなぜこのようなことをしているのか。私はこのような事態を招いている真の原因は彼らにあるのではない、と考える。おそらく中央文献研究室の編者は講話記録稿を原件のまま発表することを願ってこの問題について中共中央の関係部門に指示を仰いだことであろう。しかし中央からは旧来の規定のまま行なえ、との回答があったため、このような一種の文書偽造現象が発生しているのではなかろうか。しかしこのような措置のためせつかく出版された七大資料集もその価値を大幅に下げている。

## 歴史の書き換えで本当の学習ができるのか

龔育之は1984年4月にシュラムに『毛沢東選集』の出版にいたる過程を紹介し、毛沢東は自己の著作を自身がなしうる最善の形態で読者に提供しよう努めていたとして、『毛沢東選集』における毛沢東自らの加筆訂正行為を弁護している。そして彼は次のようにシュラムに言う。

「もちろん、ここでは一つの問題が生じます。一部の同志はそうすると毛沢東思想の発展の歴史を研究しようとしても一部の状況ははっきりしなくなってしまうと考えております。我々は、いくつかの文章は出版されたことがありますので、その原形は調べ、研究することができますものと考えます。毛沢東同志自身からいえば、彼が自己の著作に自ら校閲訂正を行なったことは、読者により完璧な書物を提供したいと願ったからであり、この点は理解しうるものです」<sup>20</sup>。

中国国内でも歴史資料として『毛沢東選集』を引用することの是非はその後も論議を呼んでいるようである。龔育之は「毛沢東文献編輯的本文選択」<sup>21</sup> において、毛沢東思想を学ぶ広範な読者

と歴史、思想史を研究する人とを区別して対処する立場に立ち、「研究者はなおいっそう原本を調べることに努力し、文献研究者もよりいっそう研究者に閲覧の便を提供するよう努力すべきである」と述べている。

では原本はどこに行けば探せるのか。

「この問題は、外国人にとってはなにも困難はない。日本人の竹内実が監修した多巻本『毛沢東集』とその続集は、毛沢東が当時発表した各種の版本と『毛沢東選集』において加筆や削除などの修訂がなされた版本との詳細な比較と校閲を行ない、各種の符号で原本にたいする修訂本の改編（どの文字、語彙、語句、段落が削除され、あるいは追加されたか）を一つ一つ明らかにしており、一日瞭然である。外国人には原本を読むことができないと恨み言を言う人がいるが、それは自分が調べる努力をしていないからにすぎない。中国人が恨み言を言うのにはそれなりに理由がある。というのは中国人にはたしかにそのような便利さが無いから。しかしきちんとした考えのある、熱心な研究者（有心的用功的研究者）はやはりいろいろな方法を講じて多くの発表された当初の版本と竹内実が編集した『毛沢東集』を読むよう努力をするものである。だから中国の研究者のために、私は次のことを特に言う。文献編集者は研究者が原本を調べるための便宜を提供すべきである。」

私は龔育之を中国の大変優れた研究者であるとかねてから尊敬しているし、これまでも彼の論文から多くのことを学んでいる。しかしこの文章には異論を唱えざるをえない。

まず事実認識の面で、「外国人にとっては何も困難はない」というのは現実に合致していない。本論の冒頭で紹介した通り、『毛沢東集』第二版はすでに日本人ですら入手不能な状態にある。『毛沢東集』や『毛沢東集補巻』そのものがもはや歴史的な文献になってしまっているのだ。さらにその内容に多くの不十分な点が含まれていることは、周一平教授が縷々指摘する通りである。中国人にとって『毛沢東集』や『毛沢東集補巻』を利用できる条件を有しているのはごく限られた人だけである。周一平教授がきちんとした考えのある、熱心な研究者（有心的用功的研究者）であることは疑いないが、彼は私が贈呈するまで『毛沢東集』に接する機会がなかった。たしかにいろいろな努力をすれば、中国人が多くの原本に触れる機会はわれわれ日本人よりも多いであろう。しかし恵まれた研究環境にいる人にとって、恵まれていない人の苦労は理解しにくいものである。条件に恵まれない人はたった一編の原件を探し当てるのにも大変な時間と労力を費やすことになる。私は『毛沢東集補巻』の資料探しをする過程でその苦労を嫌というほど味わってきた。若い世代の研究者が原典資料の発掘や解読の努力をすることはとても必要なことであるが、それはあくまでも新資料の発掘促進を目的とすべきである。すでに本来利用可能となつてしかるべきものの閲覧にあえて多大な労力を費やさざるを得ないということは、人的資源の浪費を強いることであり、学問の真の継承と発展のためには役立たない。

ではどのようにすれば正確な原本を誰もが閲覧し、引用できる環境が作られるのか。「文献編集者は研究者が原本を調べるための便宜を提供すべきである」と龔育之はいう。

しかし問題は文献編集者の努力が足りないところにあるのではない。各種資料集の刊行という点で、中国の文献編集者はこれまで着実に成果を築いてきた。毛沢東の文献でも『毛沢東文集』など近年公開された文集にはかなり多くの原典が公開されている。問題は『毛沢東選集』に収録されたことのある文献は原本ではなく『毛沢東選集』に依るべし、とする中共中央の規定にある。編集者もこの規定を遵守せざるを得ないのであって、彼らの職務怠慢のせいではない。

実は胡喬木や龔育之のような毛沢東の文献整理に直接関わってきた人ですら、これまでいろいろな形で毛沢東の原件を公開すべきことを主張している。たとえば龔育之は「關於七大的文献和回憶」において、七大当時に公開発表された版本と、建国後の1953年に『毛沢東選集』第3巻に収録される際に一部削除された版本とのいずれをも七大文献集に収めるよう要望している。<sup>22</sup> 彼の主張はまったく正しい。しかしこのような要望はずっと無視され続けている。

2003年10月に私は矢吹晋・横浜市立大学教授、劉進慶・東京経済大学名誉教授、そして北京からやってきた李海文・『百年潮』副主編と一緒に台北の中国国民党中央本部の中にある国民党党史館を訪問することができた。李海文さんが1924年の国民党第一回代表大会に参加した毛沢東に関する資料の提出を求めたところ、彼の旅費についての档案を見つけることができた。予期せぬ収穫に大喜びした彼女はさっそくそれを報告論文のなかに書き加えた。<sup>23</sup> 国民党党史館を訪れてとても印象に残ったことは、ここを利用する研究者の多くは日本人、ついで大陸からの研究者であって、地元台湾の研究者はあまりいない、と紹介する同館の職員の言葉であった。われわれが訪れたその日も中国社会科学院近代史研究所の若手研究者が来ていた。もし彼ら大陸の研究者の台湾訪問が解禁されれば、もっと多くの研究者がこの施設を利用するようになるだろう。研究者は自分の努力による新事実の発見という喜びを求めて研究をする。そのためには歴史資料を自由・平等に利用できる環境を作ることがとても大切である。透明度の高い研究環境が実現すれば、人々の研究意欲は高まり、研究者同士が切磋琢磨するなかで、科学的、客観的な、質の高い研究成果が生まれてくる。一部の特定のエリートにしか資料を利用させないというやり方をしていくと、その学問は敬して遠ざけられ、結局は停滞・衰退という手痛い懲罰を受けることになる。現在の中共党史研究の環境を早急に改善し、さまざまな側面で透明度を高める措置を取らないと、時代の潮流から取り残されてしまうのではなからうか。私をもっとも心配するのはそのような事態である。

## 研究と学習

問題は『毛沢東選集』を毛沢東思想学習のための経典と見做す考え方そのものにある。この考え方は実は毛沢東本人の思考方法に起因する。許立群（中央宣伝部副部長）が龔育之に語ったことによると、「毛沢東は全集を出すことに賛成ではなく、どの論文もみな重要などということがありえようか、といい、選集をきちんと編集すること、きちんと出版することにのみ賛成した」とのことである。<sup>24</sup>

しかしわれわれがある個人の全集を出版するのはその個人が書いたものがすべて正しいと判断しているからではなく、その人物の思想や行動を総合的・客観的に判断するために必要だからである。『毛沢東全集』の出現をわれわれが期待するのも、そのような視点からに他ならない。

しかし毛沢東はそのようには考えていなかった。彼が自分の全集を出すことに賛成しなかったことと、選集を出版する際に、過去の文章に修正を加えてより完璧なものにしようと努力を怠らなかつたことには共通した考え方が存在する。いずれも自己の著作を完璧なもの、人民大衆が学習するに値する、誤りのないものでなければならない、とする考えである。

文章を書く時に推敲すること、人々の反応を見極めつつより思考を深め、内容を高めようと努力すること、このような行動は自分の言論に責任感を持つ人なら誰もがやっていることであり、別に毛沢東だけに限ったことではない。いかなる人も自分の書いたものを修正し、よりよいものに改めようとする権利を持っている。しかし自分の脳裏にあったものが手紙や文書として発せられ、客観

的な存在になって対象物に影響を与えたからには、その言説はその時点をもって本人から離れ、客観的な存在になっている、と見做すべきである。

井岡山から前敵委員会書記の名義で中央に報告を書いて提出したら、それが中央の手元に届けられるのが遅れたとしても、ともかく発出した1928年11月段階における行動と見なすべきである。それから20年以上も経ってから、しかも誤字や脱字の訂正といった技術的な修正ではなく、内容にまで立ち入った改定を行うことは、歴史の書き換えに他ならない。これでは結末を先に知ってから推理小説を読み始めるのと同じで、「正しい」結論しか出てこないに決まっている。学習するといっても、解答が定まっている試験問題の答案を出すための学習に過ぎない。

ましてや建国後に毛沢東が『毛沢東選集』に収める段階で手を加えたものがすべて正しいとはいえない。

「論聯合政府」の本来の版本は当時、重慶でパンフレットとして3万部も発行され、国民党支配区で大きな反響を及ぼした、と毛沢東が七大の「結論」のなかで紹介している。しかか今日の中国では、毛沢東がその内容の一部を書き換えてしまったため、かつての版本を一般の人が読むことができない。

「工業を発展させるためには、大量の資本が必要である。それはどこから来るのか。二つの方面以外にない。主要には中国人民みずからの資本蓄積に頼り、同時に外国の援助を借りる。中国の法令に従い、中国の経済に有益であるという条件のもとで、われわれは外国の投資を歓迎するものである。中国人民と外国人民のいずれにとっても有利な事業というものは、中国がしっかりと国内平和と国際平和を実現し、徹底した政治改革と土地改革を実行したのちには、大規模な軽・重工業と近代化された農業を勢い盛んに発展させることができるのである。この基礎のうえにおいて、外国投資の受入量は非常に広大なものとなるだろう。政治的に逆行し、経済的に貧困な中国は、中国人民にとって非常に不利なだけでなく、外国人民にとっても不利なものである」。<sup>25</sup>

あたかも改革開放期に鄧小平が主張しているかのように思えるこの見解は、1945年4月24日に毛沢東が「論聯合政府」で展開し、しかも1953年に『毛沢東選集』に収める際に毛沢東が削除してしまった個所の一つである。この事実をみても、彼の中国の工業化、現代化への道の認識にはさまざまに曲折があったことが明白であり、1953年の時点での認識を反映している『毛沢東選集』を絶対視することが間違いであることは明らかである。

研究と学習（あるいは教育）は相互に関連し、影響し合うものであって、両者を隔てる明確な障壁は存在しない。広範な人民大衆の学習のためには『毛沢東選集』が必要であるが、歴史や思想史の研究のためには『毛沢東集』やそれに類する原典資料を利用すればよい、といった使い分けの発想は正しいとは思えない。

毛沢東に学ぶ、とは『毛沢東選集』に書かれたことに学ぶことなのか。そうではない。毛沢東の実践に学ぶことであり、具体的に中国革命の道在先頭に立って切り開いていった過程に学ぶのであって、そのなかにはもちろん成功の経験もあるが、失敗するなかで得た経験もある。毛沢東といえども一挙に成功の道を探し当てたわけではなく、さまざまな紆余曲折と度重なる思索を経てその思想は発展していったのである。しかも毛沢東の思想の発展は決して彼個人の孤立した奮闘の賜物ではない。彼とともに革命活動に従事した集団の実践の結実であるし、他の指導者との交流から学びとったことも多々ある。井岡山期、さらには江西南部、福建西部を転戦しながら書いた彼の中央に

対するいくつかの書簡には、そのような生き生きとした思想の発展過程がはっきりと記されている。その躍動する思想の営みは毛沢東とそれに関連するさまざまな原典資料を丹念に調べ、当時の具体的な状況と結びつけて総合的に分析することからでしか解明できない。

毛沢東を決して孤立させてはならない。彼を再度歴史の大海のなかに戻し、そのなかで彼の真価を見いだすようわれわれは努力すべきである。

2003年5月28日初稿

2004年9月27日改稿

- 
- <sup>1</sup> 毛沢東文献資料研究会編集、竹内実監修『毛沢東集』初版（北望社発行）は1971年7月発行、第二版（蒼蒼社発行）は1983年8月発行、『毛沢東集補巻』（蒼蒼社発行）は1983年12月発行
  - <sup>2</sup> 江西人民出版社からは革命歴史資料叢書として『井岡山の武装割拠』（1980年5月第1版、1983年7月第2版）や「与紅三軍団有関的歴史問題及文献」（1981年3月）、『中央革命根拠地史料選編』（上中下冊、1982年5月）などが出版された。福建人民出版社からは『紅四軍入閩和古田会議文献資料』が内部発行で出版され、筆者は香港のリプリント版を購入した。人民出版社から中国現代革命史資料叢刊シリーズが出されたが、『新民学会資料』（1980年9月）は内部発行であり、やはり香港のリプリント版を利用するしかなかった。
  - <sup>3</sup> 『歴史の中の毛沢東—その遺産と再生』第二版、蒼蒼社、1986年12月、121頁
  - <sup>4</sup> 龔育之『在歴史的転折中』生活・読書・新知三聯書店、1988年3月
  - <sup>5</sup> 前掲『歴史の中の毛沢東—その遺産と再生』48頁
  - <sup>6</sup> 村田忠禱「最近の中国における毛沢東研究の成果と問題点について」、『中国研究月報』1984年8月号、23頁
  - <sup>7</sup> 「中共中央給紅軍第四軍前委的指示信（1929年9月28日）」『周恩来選集』上巻29～43頁、人民出版社、1980年12月、中央档案馆編『中共中央文件選集』第5冊、中共中央党校出版社、1990年4月、473～490頁
  - <sup>8</sup> 周一平「關於党史資料整理、出版的幾個問題」『史志研究』（季刊）2000年第2期51頁
  - <sup>9</sup> 『歴史の中の毛沢東—その遺産と再生』、49頁、51頁
  - <sup>10</sup> 前同書、53頁
  - <sup>11</sup> 日本語版『毛沢東伝』下巻、みすず書房、2000年7月、「訳者あとがき」、903～904頁
  - <sup>12</sup> 高文謙『晩年周恩来』、明鏡出版社、2003年4月、李志綏『毛沢東私人医生回憶録』、時報出版社、1994年、なお李志綏の原著は英文版であり、『毛沢東の私生活』として日本語にも訳され、大量に出回った。しかしその内容をきちんと検討すれば、回想録というよりも、毛沢東の医師を担当したことがあるという彼の名前を利用してAndrew Nathanらが創作した物語という側面が非常に強く、事実と反することが多い。どうして中国がこれを批判することをしないのか、私は不思議に思っていた。1996年12月に石仲泉・中共中央党史研究室副主任と東京で交流会があった折に、香港の利文出版社から林克、徐濤、呉旭君の『歴史的眞実』と題する本が出版されていることを知った。さっそくそれを取り寄せ、内容を検討したところ、非常に重要なものであることがわかったので、当時、すでに『毛沢東伝』の翻訳という大仕事を控えていたが、それよりも先に『歴史的眞実』の日本語版を出すことにし、蒼蒼社から『毛沢東の私生活』の眞相』と題して1997年8月に出版した。『毛沢東の私生活』を読んだことのある人はぜひこちらも読み、眞実はどうか、捏造というものはどのように作られるかを知ってもらいたいものである。

- <sup>13</sup> 加藤哲郎「野坂参三・毛沢東・蒋介石往復書簡」、『文藝春秋』2004年6月号、342～349頁
- <sup>14</sup> この論文の書き直しを終えた時点（2004年9月25日）で、湖南人民出版社が出版した蔣建農、辺彦軍、劉敏、張素華著『毛沢東著作版本編年紀事』（上・下）と題する350万字におよぶ巨著を入手した。ここには1912年から1976年までの間に毛沢東が執筆したり発表した7151編の著作についての紹介が載っている。また龔育之と張静如の序文もあり、とりわけ龔育之のそれは大変内容のある文章である。毛沢東研究のための非常に重要で役立つ工具書であることは間違いない。
- <sup>15</sup> 『中国共産党党内法規選編：1996～2000』、法律出版社、2001年6月出版。『党的宣傳工作文件選編（1976～1982）』、中共中央党校出版社出版、内部発行
- <sup>16</sup> 「井岡山前委対中央的報告」、『毛沢東集』（第二版）、蒼蒼社、第2巻、26頁
- <sup>17</sup> この4件とは「没収土地建立蘇維埃」（1928年3月10日、中央通告第37号、『中共中央文件選集』第4冊149頁以下に収録）、「國際二月決議」（1928年4月30日、中央通告第44号、前同書、174頁以下収録のほうであって、1928年2月25日のコミンテルンの決議文、前同書、757頁以下収録ではないと思われる）、「軍事工作」（1928年5月25日、中央通告第51号、前同書、222頁以下）、「組織問題」（1928年1月30日、中央通告第32号「關於組織工作」か、もしそうであるなら、前同書、76頁以下）
- <sup>18</sup> 前述、村田忠禱1984年論文26頁、また本来の「前委給中央的信」（1929年4月5日）を復元し、それを日本語に訳したものは中国研究所発行の『季刊中国研究』第1号、1985年10月、157頁～163頁に「前敵委員会の中央にあてた書簡」として訳出しておいた。
- <sup>19</sup> 『毛沢東在七大的報告和講話集』の問題の個所の中国語を示すと以下のようになっている。（日本漢字で表記する。下線部分は注意を喚起するために筆者が加えたもの）「我在報告中這樣說：“人民民主勢力是一定要勝利的。世界將走向進步，決不是走向反動。”」（『毛沢東選集』と同じ）  
これにたいして「論聯合政府」の該当する個所は次の通り。「國際間重大問題，必須以三大國或五大國為首的協議來解決。各國內部問題，不例外地必須按照民主原則來解決。世界將引向進步，決不是引向反動。」（『毛沢東集』第9冊、（第二版、186頁）  
『講話集』の続きの部分はさらに「“倒退”這個問題，報告中也講到了，說應該“估計到歷史的若干暫時的甚至是嚴重的曲折，可能還會發生，許多國家中不願看見本國人民和外國人民獲得團結、進步和解放的反動勢力，還是強大的。”」（『毛沢東選集』と同じ）  
これにたいして「論聯合政府」の該当する個所は次の通り。「了解到歷史的若干暫時的甚至是嚴重的曲折，可能還會發生；許多國家中不願看見本國人民與外國人民獲得團結、進步與解放，不願看見英美蘇中法繼續團結領導世界新秩序的世界分裂主義者的反動勢力，還是強大的；」
- <sup>20</sup> 前掲書『歴史の中の毛沢東』149頁、『在歴史的転折中』266～267頁
- <sup>21</sup> 『学習時報』第173期、筆者はこれを『学習時報』のウェブサイト <http://www.studytimes.com.cn/> で見ている。
- <sup>22</sup> 龔育之「關於七大的文獻和回憶」、『党史札記』浙江人民出版社、2002年1月、181頁
- <sup>23</sup> 李海文「論毛沢東」、『評比兩岸最高領導』、文英堂出版社（台北）、2004年3月発行、30頁。日本語版は『現代中国治国論』、勉誠出版、2004年7月発行、20頁に収められている。
- <sup>24</sup> 『党史札記』、198頁
- <sup>25</sup> 『毛沢東集』第9巻、252～253頁